

象徴意識

Symbolic Thinking

永田円了



物事を見るとき、三つの見方がある。みんなが見るように見る（第一のみち）。俺、私、が見るように見る（第二のみち）。そして、私を離れた「心」の目で観る（第三のみち）。今回のテーマ、象徴意識とは、「第三のみち」の意識のことである。

例えば仏像を見るとき、目は半眼、手はいつも開いている。右手に何か持っている。マンゴーの実だった（真国寺の本尊）。これを象徴意識をもって、どう読み解けばいいのか。

立って6尺、座って3尺前を見ている半眼は、相手を見てはいない。自分自身の内側を見ているのである。外界で起こる事象に振り回されるな。外界の出来事は、単に出来事。それを自分の内界がどう受けとめるかで、価値が決まる、という意識である。

手は緩やかに開いている。まるで赤ちゃんの手のように。この手は柄杓のように、水をすくって相手にもあげることができる。また、自分自身で飲むこともできる“helping hand”である。この優しい手は、万人に宿る仏心を象徴的に表しているのである。



マンゴーの実、これには物語がある。2,500年前のインドで釈迦が弟子を連れて行脚をしているとき、他宗の輩がマンゴーを献じた。当時のインドでは、仏教は新興宗教の一派、その度量を試そうと既存の宗教団体が挑んできたのである。釈迦はマンゴーの実を受け取り、他者を受け入れる寛容な姿勢を示した。宗派を越え、万人を受け入れる仏教の姿を、800年前に作られた仏像が物語る。マンゴーの実が投げかけるメッセージは、象徴的であるが故に、時代を越えて人々の心に受け継がれる。

出来事の「表層意識 vs. 象徴意識」

日々起こる出来事を、単にその時の自分の「感情、思い、過去の経験」のみで受け止めるなら、ただ反射的に反応するのみである。しかし、もしそこに、待てよ、もしかしたら何かメッセージが潜んでいるのでは、と問うなら、何か今までとは違った風景が見えてくるのである。

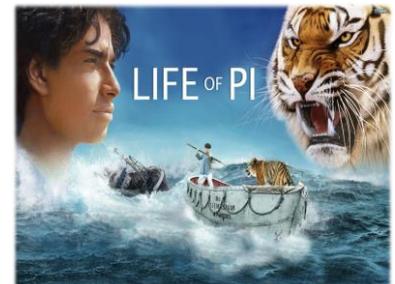


養老孟司氏が、学生が提出したレポートの採点で、ハッとすることがあった。親が自分を愛していないと思い込んでいたのが、実は親は自分たちのこと、仕事のことで精一杯で、他のことを考えることができなかつたのだ、という過去の出来事の受け止め方の変化を書いたレポートだった。表層意識のみで、受け入れていた自分の現実と、親の現実が違っていた、との気づきであった。

ただ反射的に反応する表層意識が、奥に潜む意味を問う象徴意識に至ったとき、人生風景が変わる。

<事例 DVD>

映画『ダビンチコード』 象徴から読み解けるもの
 映画『ライフ オブ パイ』トラ、オラウータン等が意味するもの
 養老孟司、レポートの採点／親の現実 vs. 私の実
 映画『アラバマ物語』モッキングバードを殺すな、とは？
 正高信男／老象の知恵を語る
 映画『樽山節考』／仏教を一言で表すなら、
 高史明／父母のために念仏を唱えず、とは？
 篤姫／比喩の説得力
 歌・飛鳥「木綿のハンカチーフ」



円了のホームページ: www.enryo.jp